

# 疾病対策

CASE STUDY

## 一歩進んだ

## IBウイルスの遺伝子型判定

### 生産性向上のための優良事例(養鶏)

本誌82号(2012年10月発行)では、鶏のIB(伝染性気管支炎)のウイルスを遺伝子型まで判定する新しい技術を紹介した。今回はその活用を促進してきた全農クリニックから、実際にIB対策で効果を上げた事例を紹介する。

事例①の農場で認められた卵殻異常卵



### IBについてのおさらい

IBは、IBウイルスの感染によって、呼吸器症状や腎炎、下痢、産卵率やハウユニットの低下、小さい卵や殻のない卵の発生など、さまざまな症状の出る鶏病である。

IBウイルスには多くの型があり、20種類以上のワクチンが市販されている。しかし農場にいるウイルスとワクチンの型が合わないと効果が十分でないことがある。全農クリニックでは、農場にいるウイルスの遺伝子型の検査を実施し、農場がその型に効果のあるワクチンを選ぶことができるよう、お手伝いをしたいと考えている。

### IB対策の事例①

関東地区の農場でヒナを成鶏舎に移した後、「産卵ピークがはつきり出ない」「軟卵や破卵が多い」「斃死が多い」などの現象が複数の鶏群で続き、全農クリニックに相談が寄せられた。そこで、成鶏舎への移動後、定期的に血液をサンプリングし、IBやMG(マイコプラズマ・ガリセプチカム)の抗体価を検査した結果、成鶏舎移動後にIBの抗体価が上昇する鶏群が確認された。

同時に、糞便サンプルを用いてIBの遺伝子型の検査を実施した結果、IBウイルスの遺伝子型はJPIIタイプに属し、この農場で用いているIBワクチンの型とは異なることもわかった。そこで生産者と相談をしたところ、現在市販

た。その後、これまでの産卵異常は見られなくなったそうである。ワクチン変更の判断が大きな効果を表した例といえるだろう(図2)。

IBの遺伝子型検査は採血の必要がなく、新鮮な糞便サンプルがあれば判定することができる。検査を実施したい農場や、IBにお悩みの農場があれば、本誌をもとにお近くのJAやくみあい飼料の営業マンまでご連絡をいただきたい。

### IB対策の事例②

次に東海地区の農場で、産卵率やハウユニットの低下が季節に関係なく起こるといふ報告を受けた。図2のとおり、若い鶏のうちからハウユニットが低く、全農クリニックで血清抗体検査を行ったところ、鶏群AとBで、IBの発生が強く疑われた。しかしこの農場では、すでにIB対策の一環で、成鶏にもワクチンの接種を行っていた。プログラムは2カ月に1回、「Ma5型」と「4-91型」のワクチンを交互に使用していた。そこで、ワクチンの型が農場の流行株と合っていないことが疑われ、生産者と相談したうえで遺伝子型検査を行うことを決めた。

検査の結果、農場の流行株はJPIIタイプに属するとわかり、成鶏舎で接種していたワクチンを「4-91型」から「TM86型」に変更することになった。



写真はイメージです

図1.事例①で、ワクチン変更後の鶏群のIB抗体価

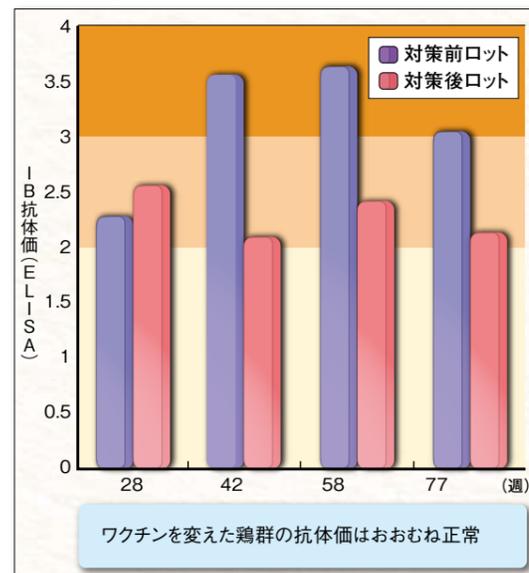


図2.事例②の農場で、鶏群別に調べたIB抗体価

